

二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

Sword ソード
Symphony シンフォニー
悦楽の交響曲

小説 狩野 景

挿絵 高浜太郎

第一章	劍士と魔法使い
第二章	捻れの森の魔女
第三章	魔の饗宴
第四章	淫虐の闘技場
第五章	魔戦士の反撃

登場人物紹介

Characters



セーラ

剣技と格闘術に優れた女傭兵。プライドが高く激しい気性で、口が悪く喧嘩っ早い。

ハリエッタ

マリリオン国の宮廷魔導士。内気な性格でちょっぴりドジな眼鏡っ娘。

ナスターシア

強大な力を持つ魔女。幼子のように純粹無垢な残酷さを持つ。

嫌悪感を抱きながらも、じわりと染みるような快感に声を漏らしてしまう。

「おつ、なんだこのアマ。嫌だつて言うわりには、しつかり感じてんじゃねえかよ。しかも乳首までこんなにおつ勃てやがって、とんだ淫乱剣士さまもあつたもんだ」

頑丈な革鎧の越しに浮き立つ突起を、指先でつまみながらなじる。

「う、うるさい！ お前なんか、感じているわけじゃ——ひはあつ!!」

確かに勃起した乳首も、艶めかしく汗ばむ肌も、ハリエツタからの刺激に煽られ反応してしまった結果だ。しかしいまでは男の手にまさぐられる感触も、加味されていることは否定できない。

抗議の言葉も、喘ぎ声に転じてしまう。それに調子づいた巨漢は、手のひらに貼りついてくるパン生地のような乳房の弾力を味わいながら、新たな悦楽の版図を求め、手首は縛ったままでセーラの身体から鎖を解き始めた。

胸当てと腰当てを繋ぐ交差した革ベルトに飾られ、白い腹部が滑らかな線を描く。その表面に男が指を這わせると、セーラはくすぐったいような感触に、しつとりとした肌の下のしなやかな筋肉をくねらせる。

そして太い指先が無遠慮に、可愛らしく窪むへそをほじると、唇を固く噛みながらぴくんと、身体を仰げ反らせた。

「全身どこも敏感なようで、傭兵っていうよりやあただの淫売だな。どうせ戦場でも、身

体でたぶらかした男に、守ってもらっていたんだろが」

悔しさに震えながらもセーラは、男の侮蔑に言い返せない。

「こ、こんな……おまえなんかにつ！ ふわうっ!! ん、んはあぁっ……」

口を開けば迸ってしまう、悩ましい声をこらえるだけで、いまは精一杯だ。ハリエッタからの間接的な責めと、自分自身で受ける直接的なものとの二重責めが襲う。それを振り払う力もなく、身をよじらせるだけの彼女を、巨漢兵は凶々しさを増してまさぐり続ける。そして遂に男の淫手は、腰から下を包むミニスカート型の防具を捲り上げ、中へと潜り込んだ。キュッと引き締まった形のよいヒップを、ぐりぐりと乱暴に揉み上げる。

「くっ！ こ、の、ばか、ぢから……んはう……」

指が食い込む痛み顔に顔をしかめ不満の呻きを漏らす。だが巨漢兵は彼女の苦痛などお構いなしに、もう片方の手でセーラの股間を大胆に挿んだ。

「——ひっ!! うっくううっ……」

大きく身体を跳ね上げて女戦士は、悲鳴を押し殺して震える。だが全身を痺れさせる激感をこらえた彼女を嘲笑うように、男は指先に触れたぬちゃりという、ぬめる感触に小躍りした。

「うひゃは、こいつぁあ!?!」

すぐさまセーラの股間から手を引き抜き、その指先を自分の鼻先に持ってきて、これ見

よがしにクンクンと匂いを嗅いでみせる。

「どうしたのですか？」

その仕草に、ナスターシアが興味深そうに尋ねた。

「王女さま、この女、勝負の真っ最中だつてなのに、びちよびちよですぜ!! ちよつと身体を触られただけで、牝犬の匂いをぶんぶんさせやがつて……とんでもねえ淫乱だあつ!」
粘度の高い液に濡れ、てらてらと猥雑な光を放つ指先をナスターシアに掲げる。そこから放たれる香りの濃厚さに、巨漢兵はうんざりしたような表情を浮かべながら訴えかけた。
「命と誇りをかけた戦いのさなかだというのに、なんて浅ましいのかしら。呆れたものね、セーラさん」

不愉快そうに眉をひそめナスターシアが蔑む。

「ち、違つ……ひゃああはっ!!」

その見下した物言いに、セーラは頭に血を上らせ言い返そうとした。しかしその途端に、ハリエツタが受ける淫虐が襲いかかる。ピンと勃ち膨らんだ巨クリトリスを、魔導士が指先で上下にしごき始めたのだ。

「ぬんっ……くああう! やああ、そんなことしちゃあつ!!」

鼻にかかった甘い媚声が転がった。神経の集中した敏感な粘膜を、執拗に擦り上げられ、かじかんだ指を熱い湯に浸したような、痛みに近いむず痒さが股間の一点でうねる。

セーラは肉の疼きに耐えきれず、太腿をこねるようにすり合わせながら、いやらしく尻を振りたくり乱れた。肌をねっとり濃厚な汗が伝い、股間から立ち上る、多量の愛液の香りと入り混じって、熟しきって醗酵した果実のような、むせ返るような女臭を漂わせている。淫靡なダンスを披露する踊り子のように、全身を扇情的にくねらせる動きが、狭間に深い谷間を作る二つの乳球を妖しく震わせた。

身体を苛む快感に満足できず、さらに官能的な快楽を求めて媚びる。発情した淫乱女さながらにセーラは、股間から全身を蝕む、信じがたい敏感陰核の刺激に翻弄されていた。

「くふうんっ!! んやっ! は、はああああん……」

眉間に皺を寄せ、小さく開いた唇から、赤い舌を覗かせる切ない表情を浮かべると、女戦士は艶めかしい吐息を漏らした。

「まさにさかりのついた牝犬そのものね。臭い発情臭が、ここまで匂ってくるわ。せつかく助かるチャンスあげたのに、あなたは違うことを望んでいたのね。わかったわ……」

乱れるセーラの痴態に最大の侮蔑を込めながら、ナスターシアは巨漢兵に命じた。「命を奪う前にこの不謹慎な淫売を、貶めてあげなさい。彼女の大好きな行為で」

そして再び、遠隔淫虐に苛まれながら、男の手から逃れようと身体をよじらす女戦士に向かつて、最後の宣告を放った。

「名勝負を期待して集まってくださった方々への、せめてもの償いをするのね、セーラさ

ん

その言葉を最後まで聞かぬうちに、いままで執拗に肉体をまさぐっていた巨漢の手が、乱暴にセーラを突き飛ばした。

「あうっ！」

ただでさえ力の抜け落ちた足をもつれさせ、どすんと尻餅をつく。手を後ろに鎖で縛られたままセーラは、ぺたりと横座りになった。

引き締まった尻をミニスカート状の腰当てからはみ出させ、次々と伝わりくる快樂の波に息を荒くしながらびくん、びくんと跳ね震える。その動きに、いままで男の手に揉みなぶられ、形を歪ませていた熟乳が、艶やかな汗に濡れ光り、弾力に任せ揺れ乱れた。

「ぐえっへっへ、王妃さまそっくりな女を犯りまくれるなんて、いきり勃ちまうぜっ!!
ほらこのとおりだ！」

低い声でセーラにだけ聞こえるように囁くと、彼はおもむろに股間を覆う革帯をほどき、怒張に猛り狂うペニスを露わにした。先端から我慢汁をあふれさせ、てらてらと黒光りする巨根に彼女は思わず目が奪われ離せなくなる。

「ぐふふ、どうだ。これをいまずぐにぶち込んで欲しいんだろ？」

ペニスをゆつくりとしごきながら、もったいぶるように男が言う。

「ふ、ふざけんな。そんな汚い粗末なもの、見たくもない！」

ぐびりと喉を鳴らしながらもセーラは、ずくずくと膨れ上がる欲求に逆らって否定した。しかし、その言葉にナスターシアがぐすりと白々しい笑いを漏らしながら、女戦士のへたり込んだ下半身を示す。

「あら、ではそのはしたない動きはなにかしら？　もうひとときも我慢できないみたいだわ」

そのとおりだった。男根を目にした途端、発情の歯止めが利かなくなったように、肉体は男を求めて行動を開始していた。

子宮が大きく脈打ち熱い淫水がいままでも増して噴き出す。その滴りはショーツのきわどい布地はもちろん、闘技場の乾いた土をも、ぬめり輝く妖しい染みで濡らした。甘い疼きに苛まれ無意識のうちに、腰がぐねり、股間を地面に擦りつけてしまったのだ。

魔女に指摘され驚いて止めようとするが、意識すればするほど、じゅわん、と淫汁を滴らせ、腰の動作は妖艶さを増すばかり。

「やはあっ!!　セーラさん、そんなとこ、押しつけちゃ……余計、おかしくなっちゃふわっ!」

その刺激にたまりかね、ハリエッタからの思念が頭の中で訴える。しかし彼女が牢内で受ける辱めも、依然としてセーラをいたぶり続けているのだ。

「——くっ、胸……つあは……む、胸あが……」

魔導士にまさぐられる刺激に、勃起していたセーラの乳首はさらに硬さを増す。その先端が革胸当ての裏地に擦れて、たまらない痛痒さを生んだ。念話で話したことが余計に精神の接続を強めてしまったのか、彼女たちは互いの身体に感じる快感に翻弄され、狂おしく乱れる。

「へっ、ちんこを見ただけだっていうのに、すっかりまいっちゃったようだな。つくづく淫乱な女だぜ」

呆れ果てたように吐き捨てながら、巨漢はセーラのおとがいを掴み、強引に立ち上がらせると、硬い男根の先を、ショーツの上から彼女の股間に押し当てた。

「ふあうっ！」

ペニスの先端が濡れた布を窪ませ、わずかに埋まってしまふ。もう少し力を込めれば、薄いショーツは破れ、肉棒はいとも簡単に根本まで、ずぶずぶと入ってしまうだろう。だが男は、焦らすように先端をびったりと密着させたまま、セーラの膣口をくりくりとなぶりだした。

「ひんっ!! や、やめ、ろ……」

布越しのねっとりとした刺激に呻き声を上げ、セーラは思わず男の肩にしがみついてしまった。ペニスが股間の割れ目をほじるように、前後へと滑らされる。ぱっくり開いたヴァギナの周囲を、何度もこね回しながら、決してそれ以上踏み込んでこない。もどかしい

刺激に、やめろという言葉も、物足りなさを訴えるようにしか聞こえなかった。

「げへへ、なんだ、やめちまってもいいのか？ これを早くぶち込んで欲しいんじゃないのか!？」

意地悪に尋ねながら男は巨根を引き離す。セーラに自分から求めさせ、それを嘲笑おうというのだろう。しかし彼女は、気丈にも言い放った。

「ふ、ふん……そんな貧弱なもの、だ、誰が……」

ともすれば自分から腰を突き出して、亀頭に擦りつけてしまいたい衝動を、必死で抑える。突如股間から失せた快感への欲求に、禁断症状を起こしたかのように、物欲しげな目を潤ませ、興奮に鼻腔が膨らんでいた。ぶるぶると震えが走り、掴んだ男の肩に爪を食い込ませてしまう。

いかに強がろうとも、もうこれ以上我慢できない状態にまで、セーラの官能が高まっていることは明らかだった。

「へん、そうかい!？」

それを見透かした巨漢が、残虐な笑みを浮かべた。立っているのがやっとの、セーラの腰をしっかりと両手で押さえつけると、ペニスを再び股間目にかけて突入させた。これまで膣口付近を執拗になぶり続け、あえて避けるようにしていた場所。女体でもっとも敏感とされるクリトリス目がけて、叩きつけるような勢いで亀頭を押しつけた。

「——くぐうっ!!」

雷に打たれたような衝撃が、セーラを襲う。途端に全身の肌が粟立ち、むんと匂い立つ汗が噴き出す。

「ふやああああっ!」

緊張に硬直していた身体が、ぐにやりとよじれ、両足がかくかくと震える。しかし巨漢の腕は倒れることを許さない。濡れシヨーツの上からでもわかるほど、硬く勃起膨らんだクリトリス。

ただでさえ女体を狂わせる快楽を生み出すというのに、ハリエッタの巨大陰核の影響を受けて、想像を絶する鋭敏さを得たそこを、男は押し潰すような強さでこね回した。

「きいひあああっ!!」

身体を大きく仰け反らして、甲高い叫びを上げた。固定された腰は、逃げることもそれ以上求めることもできず、柔軟な尻肉を小刻みに震わせる。ぬちゃぬちゃと淫靡な音を響かせて陰核を弄ぶ刺激は、セーラの肉欲を押しとどめていた、最後の枷を粉碎した。

(ひ、嫌っ! 凄い、くるのっ!! こんな……おかしくなっちゃう。なのに——いい……んくはあ!!)

際限なく昇り詰めてゆく意識に、視界が光でいっぱいになる。切ないような狂おしいような感情が、下腹部ではちきれそうに膨れ上がった。それでも巨漢の硬直は容赦しなかつ

た。包皮を完全に脱ぎ下ろし、濡れ布の下で震える快樂核を、これまでよりひときわ強い、こそげるような強さで、ごりん、と穿ったのだ。

その瞬間、セーラの胎内で膨れ上がっていた様々な感情や感覚が、風船が割れるように弾けた。

「——ぐっ、うくううう……ツ、ク、つあはああつ!!」

こらえにこらえたものを、一気に放出する、艶めかしい喘ぎを吐き出し、セーラはぶるぶると大きく震え上がった。ヴァギナからは多量の蜜汁がぶしゅつ、と淫猥な音を立て、股間布を押し上げる勢いで噴き出し、失禁でもしたかのようにポトポトと滴り落ちる。喘ぎと共に大量の息を吐き出すと、彼女はガクガクとその場に崩れ落ちてしまった。

「なんだよ、この女、股ぐらを擦られただけでイッチまいやがったぜ」

嘲りの言葉すら耳に入らない。全力疾走を行ったあとのように、セーラは激しい呼吸を繰り返しながらぐったりと地面にへたり込んでいた。巨漢兵の言うとおり、彼女は陰核をこねる執拗な快感に、絶頂を迎えてしまったのだ。へたり込んだまま、快樂の余波にふらふらと身を揺らす。

昇り詰めた悅樂は徐々に収まりつつあるが、それでもまだジンと痺れたように、身体を思いどおり動かすことができない。切なげな表情で高ぶりが去るのを待つセーラに、頭上から潰れた声が降り注いだ。

「へっ、まだ満足しきれねえってツラだな」

男の蹂躪は終わっていなかつた。赤い髪を鷲掴みにセーラの放心した顔を上げさせると、その顔面にペニスをなすりつけた。

「……んああ！」

巨漢兵の我慢汁とセーラの愛液が入り混じった、ツンとすえた異臭が鼻を突き、思わず顔を背ける。だが巨漢は嫌がる鼻腔に、握り拳のようにごつごつと膨れた亀頭の先端を突き立て、言い放った。

「今度は中までぶち込んで欲しいんだろ？ だったら、今度はてめえが上の口で奉仕しな！ 俺を満足させられれば、たっぷり天国を味わわせてやるぜっ!!」

いままでだったらその言葉に、ためらわずくわえてしまったかもしれない。しかし一度絶頂まで達したことが、正気を幾分取り戻させていた。

セーラは硬く口を閉ざし、突き入ろうとする亀頭から必死で顔を背けた。しかし執拗な追撃は、彼女の顔面に太い肉の硬棒を押しつけ、べちよべちよと男汁で濡らす。

汚臭を嗅がないように息を止めて逃れるが、長くは続かない。わずかに唇を緩め、隙間から空気を吸い込もうとすると、途端に男根はわずかなその狭間から潜り込もうと、こじ開けにかかる。

「んんんっ!! むああっ!!」



しかしセーラは慌てて唇を閉ざし、窒息しそうになりながらも、汚濁棒から逃れた。

突入行為が未遂に終わると、男は腹いせとばかりに彼女の顔中を、ぬらぬらと粘り液で塗りたくりながら総毛立つような嫌悪感を与え続けた。柔らかな頬をグイグイと押しつけてませ、整った鼻筋に亀頭のカリを這わせる。

灰色の腫を覆う脛やそこから伸びる長い睫を、不浄な腐汁で濡らし、やりたい放題に巨ペニスは顔中を横行闊歩する。

「むわあう……んわあ、汚い……ひ止めえ、ゲスやろうっ！」

唇の端から悪態を漏らし、ブンブンと顔を振りたくって拒否した。しかしこうして逃げまどっている間にも、ハリエツタから快感は伝わる。男根になぶられ絶頂に達し、感じやすくなった股間が、またしても疼き始めてしまった。

ひとときの不快感を耐え、快楽を受け入れてしまったほうがよいのではという誘惑が生まれ、心を惑わす。その内心を察知したように男が言った。

「なに言ってるやがる！ 俺様のチンポに散々股ぐら擦られて、イッチまったくせに、気取ってんじゃねえっ!! 今度は奥までぶち込んでやるから、その前にそのお上品なお口で、俺を満足させてみるっ!!」

そう告げながら棍棒のように太い肉根で、細く整った彼女の頬をビタンビタンと叩く。
(うく……そうよ、もつと汚いちんこをしゃぶったことだつてあるんだから、これくらい

どうってこと……)

ほんのわずかな心の緩みが、硬く食いしばっていた唇をほころばせる。その隙を巨漢兵は逃さなかった。彼は正面から口腔目がけ、自慢の太長いペニスをひと息に突き立てた。

「んぐう!!」

勢いよく深々と喉の奥を突かれむせる。最悪の風味を口の中に充満させる毒棒を、完全にくわえてしまった。こうなったらもう下手に逆らっても、余計に不愉快な時が長引くだけだ。それよりも自分自身も肉欲に身を任せ、相手を絶頂に導いてしまうほうがいい。それに——ひとつ考えがある。

次の瞬間セーラはねつとりと柔らかい舌を男の亀頭に這わせ、敏感な裏筋から尿道までを大胆に舐め上げた。

「うおう、こりやすげえぜ。この剣士さまは、どうやら剣よりも、男竿の扱いのほうがお上手のようですね」

大胆かつ繊細な舌奉仕に巨漢は、観衆に女戦士の淫乱さをアピールする。

「はっはっは、これはなかなか。城下町一の高級娼婦でも、あれほど熱烈な口技はしてくれぬぞ。彼と交代したいものだな」

「まっ……なんてお下劣な。野蛮な傭兵風情が、淫売の真似事までするなんて。恥を知らないけど以下のすわ」

第五章 魔戦士の反撃

セーラは、力強い腕に両肩をがっしりと掴まれ、否応もなく後ろに引き倒されてしまった。仰向けになった視界に、メントースの醜怪な顔が、アップで飛び込んでくる。いままですぐに陵辱を与えられた敵から離れようともがくが、身体はびくとも動かなかった。

「くっ、放せ！ 薄汚い手で、さ、触るんじゃないっ！ ふあうっ!!」

女性にしては並はずれた剛力の持ち主とはいえ、官能に股間を疼かせた無防備な状態で、メントースのような巨体に捕まったら為す術もない。

興奮に錯乱していた意識も、セーラの胎内に精を放つことで、平静を取り戻したようだ。下品な笑みを浮かべる口から、メントースは侮蔑の言葉を吐き出した。

「ぐへへ、その薄汚い手に全身まさぐられてヒイヒイよがっていたのは、どこのどいつだあ？ おとなしく観念しやがれ!! ——おい、お前ら、こいつの脚、押さえてろ！」

じたばたと暴れるものの、巨漢將軍の命令で駆けつけた屈強の兵士ふたりに、愛液に濡れた長いブーツを取り押さえられ、ますます身動きが取れない。

「ち、ちくしょうっ！ んああつ、やめろっ!! な、なににするつもりよっ!!」

無骨なアクセサリーと化した肘当てに手甲をはめた両腕と、太腿までをびっちり包み

込むロングブーツを履いた両脚を、セーラは大きく広げた状態で固定されていた。

ブラジャー型の胸当てが外された胸では、仰向けになってもむっちりとした盛り上がり損なわない美巨乳が、頂上の桜色をした小さな乳首を情欲に震わせる。娼婦のように艶めかしい裸体に場違いな鋼の肩当てが、物騒な輝きを放っていた。

さらにはショーツを剥ぎ取られた腰から下をきわどく覆う、淫らな体液を染み込ませ、しとしとになったチエックの腰当てが、セーラが身じろぐたびにだけは、いまだ汁濡れに輝き、ほころび開いた淫花弁を丸見えにする。

周りを取り囲みながら、剥き出しの欲望にギラギラと目を輝かせ、セーラのあられもない姿を覗き込む貴族たちを示し、メントースは問いに答えた。

「俺だけが美味しい思いをしたんじゃ、申し訳ねえからな。こちらにおわす方々にも、てめえと、あの眼鏡のガキを味わってもらおうって趣向よ！」

そして立たされた姿勢で、背後から獣男にヴァギナを貫かれるハリエッタを指さした。

「ひいつ、セ、セーラさあ、ん……」

不安そうに名を呼ぶ少女魔導師の声は、掻き乱される膣の快感に上擦っている。

『「ハリエッタあ、ま、魔法……その、サークレット、……くうつ、外せないのお？」』

魔法を封じているという素っ気ない細工の輪飾りは、三つ編みに編んだ硬い髪が、二本の角のように突き立つ少女の頭に、ただ被せられているだけだ。牢内で腕を繋がれていた

ときならまだしも、いまなら、自分の手で抜き去れそうに見えた。

『んくう、だめですつ……魔力が働いていて、私には触れることもできないんですうっ！』
もしやと思った希望はもろくも潰えた。ハリエツタから流れ込み続ける快感は、一度絶頂までのぼりつめてしまった肉のうねりを、なかなか静めさせてはくれない。悦楽に脱力した身体では、押さえ込む男たちの手を振り払うことすらままならなかった。

なにか助かる術はないだろうかと考えを巡らせる中、貴族たちの輪を割って、漆黒の衣に身を包んだ、白き肌の魔女がセーラの足もとに進み出た。凍るような光を放つ蒼い瞳で、しどけない姿をさらす女戦士を見下ろし、言い放つ。

「男をくわえ込むのが大好きな、あなたにお似合いの格好ね。そんなに腰をよじって、待ちきれないのかしら？」

ハリエツタの膺を擦り続ける獣男のストロークに、自然と身体が動いてしまうのを止められない。恥ずかしさと悔しさに、セーラは無言で唇を噛み、ただ睨みつけるしかできぬ。その様子に満足そうに頷くと、魔女は傍らに寄り添う、瘦せた長身の老人に囁いた。

「さあ、お義父さま。お望みどおりこの女をお好きになさってください。亡き王妃さまに、生き写しのお顔をしているけれど、この女は、淫売よりも色欲に狂った、あさましい牝犬。清純なプリシラさまと違って、どのように激しい責めも、喜んで受け入れるわ。さあ……レオナード王……かつて誇った王者の猛り狂いを蘇らせなさい……」

鈴の音のように澄んだ声が、嘎れた魔女の呪言に変わる。その途端、老いさらばえた王の股間が、むくむくと不自然なほどに膨らみ出した。

「ぐ、ぐおおおおお！ プリシラ……プリシラアッ!!」

突如獣のような声を上げて、レオナードは下半身を包むタイツを破り捨てた。骨が浮き出て、皺だらけの細い脚が露わになる。だがなんと、股間のペニスは、驚くほどの巨根となつてそそり勃つていた。

「ひっ!! そ、そんなもの入れられたら、壊れちゃう……」

ナスターシアの魔法によつて巨大化された超根に、セーラの顔が強ばる。亡き妻の幻影を抱かせる彼女へ、老人とは思えない勢いで、王は覆い被さつてきた。

「ふんんっ!! いひい、ひやああっ!」

いきなりに乾ききつた唇を押しつけられて、セーラは気色の悪さに悲鳴を漏らす。口を割つて忍び込んでくる舌は、風化したスポンジを思わせる。興奮に荒くなつた息は、吐き気を催す死臭がした。

必死で顔を背けようとするのだが、レオナード王は、若い生気を吸い取るかのように、セーラのぼつてりとした唇をべちゃべちゃと涎まみれにしながら舐め回す。そして枯れ枝のような指で、弾力にあふれた胸を揉みまさぐるのだ。冷たくガサガサの肌触りは、死者に抱かれているような嫌悪を感じさせる。潤い湿つた膣口に巨大な亀頭の先端を押し当て

られると、開ききつた陰唇は悦びに花卉をひくつかせ、思考を溶かす快感を生み出す。

「んくっ！」

反射的にセーラは、自ら腰を押し出してしまった。途端に先端が、ぬぼりと潜り込む。普段ならいくらかの抵抗を感じるはずの巨根のだが、長時間、尋常ではない快楽に翻弄され続けたヴァギナは、貪欲な大口を開き、いままで以上の悦楽を与えてくれるであろう大ペニスを、簡単に通過させてしまったのだ。

「んわああっ！ うそ、うそ、いやあっ！！ やめ、やめえ、やめてえええっ！ そんなっ、太い、入んないああああああっ！」

大慌てで拒絶するセーラの意思とは裏腹に、ヴァギナはすると超根を受け入れてしまう。襞を絡みつかせる膈壁を擦り上げながら、長い竿の半分ほどを女戦士の胎内に収めると、レオナード王のペニスは、心臓のように脈打つ子宮を、ドズンと突き上げ、老人とは思えぬ激しいストロークで、彼女を揺さぶり出した。

「がふっ！ くわう……きはあっ！！ ひやあっ！ はんんっ……」

ヴァギナからはペニスの一突きごと、潮吹きのように多量の蜜液がぶじゅんと迸る。全身を濡らす汗も、まるで愛液のような粘度を持ち、男の発情を促す果実酒の香りを放つ。

全身を発情液に濡らしながら、快楽に喘ぐ淫欲戦士の周りで、お預けを食らったように恨めしい顔で見つめる貴族たちに、ナスターシアは命じた。

「お義父さまも、セーラさんもこんなにがんばっていらっしやるのですから、みなさんも応援してあげたらどうかしら？ 濡れ湿った身体を、白液で彩ってあげなさい」

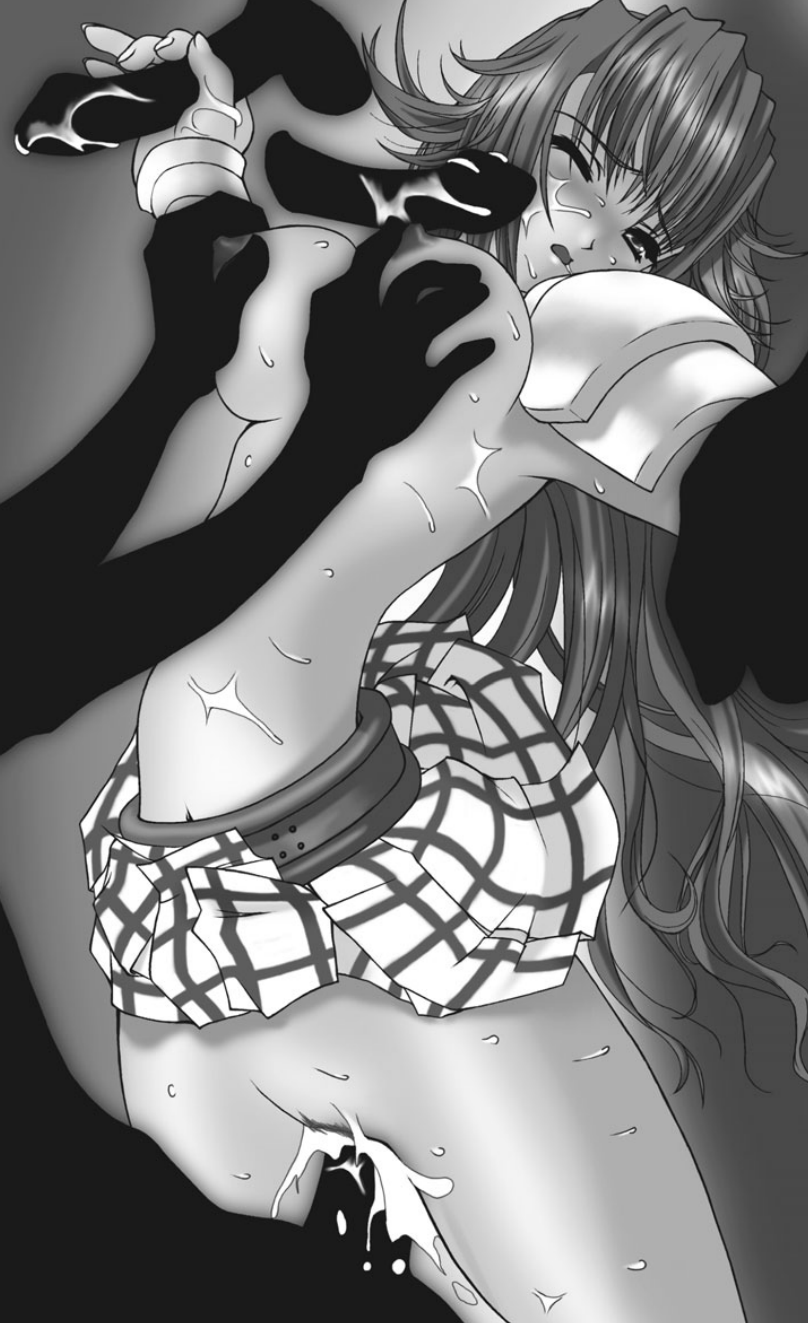
その声に導かれ、貴族の男たちが、次々とタイツを下ろす。ガチガチに勃起膨らんだペニスをしごきながら迫ってくる彼らに、セーラは取り囲まれた。のしかかりヴァギナを突き揺さぶる国王を擦り抜けて、くちゅくちゅとカウパー液の音色を奏でながら、何本ものペニスが突き出される。

「んっ、やはあっ！ だ、だめえ……」

そのぬめった先端を顔面に押しつけられ、女戦士は叫びを上げた。鼻を突く腐臭に、嫌悪を表すのだが、その反面、胎内で疼く欲情を揺さぶられ、媚びるような調子が声に表れてしまう。顔を背けても、避ける方向から別の男根が、ぐちゅぐちゅときめ細かな肌をなす。たちまちセーラの顔は、男たちの汁でべとべとになった。さらには握りしごけと言わんばかりに、しなやかな指を無理矢理、硬直した勃起根に絡められてしまう。

「ひゃあはあ、いやあっ！ おかしくなっちゃうっ！！ こんないっぱいだめなおっ！」
セーラは数限りないペニスに囲まれ、狂おしい悲鳴を上げた。言葉では拒絶しながらも、両手は彼らのペニスを擦り上げ、奉仕してしまふ。

「あら、あなたの大好きな、殿方の肉根なのに……本当は、身体中全部の穴を、埋めて欲しいのでしょうか？」



「違はうっ！ もう嫌あのうっ！！ あ、おうっ、奥っ、奥凄く当たるうっ！ クウ……イキすぎちゃうのおっ！！ はっ、またっ！！ だめッ！ くっ、ふああああああああっ！！」

またしても絶頂の波がセーラを翻弄した。両手に貴族の男根を握り、ヴァギナに国王の超根をくわえたまま、腰を跳ね上げびくびくと激しく痙攣する。

収縮する膣は王の巨大なペニスを締めつけながら、わずかな隙間から勢いよく、熱い絶頂潮の迸りを噴出した。全身で快感を味わいつくし、がくりと脱力する。しかし、絶頂の余韻に浸る間もなく、続けられる国王と貴族たちの責めがセーラを苛む。

「——ふはう、もう、これ以上、んああああん！」

限度を超えた快楽に頭が破裂しそうだ。これ以上続けると、正気すら失ってしまふ。それなのに肉体は貪欲に、巨肉の突き上げを受け入れ、さらなる刺激を求めてわななく。

両脚はレオナード王の腰へと勝手に絡みつき、少しでも深くまでペニスを膣内に収めるためぐりぐりと股間を押しつける。意思に逆らい暴走を続ける身体に、セーラは思わずこの場で唯一の味方の名を呼び求めた。

「あひゃあああつ、ハリエツタア！ だめえ、もう、凄いのイヤあつ！！ やめてええつ！！」
しかしセーラと精神を同調させる少女魔導士もまた、限度を超えた快楽に乱れていた。

背後からハリエツタの upper body を抱え起こすように、獣男の節くれ立った指が巨乳を鷲掴み

にし、せっかく新調されたブラウスを、その下の白いブラジャーもろとも引き裂いた。

「ひゃううんっ!!」

触ればしつとりと手に馴染む感触を与えるであろう、薄桃に上気した柔肌が露わになる。まだ幼さを残すぽっちゃりとした体型に、そこだけ場違いなような巨球がこぼれ出た。

セーラのものよりは幾分小振りだがよく熟れ実った、男の手に余るほどの大きな乳房であった。頭頂には、薄紅色の小さな乳首が隆起している。滑らかな絹のような肌同様、いまにも溶け落ちてしまいそうなほどに柔らかいそれは、破れた純白の布地をまわりつかせ、重力に逆らうことなくふるふると揺らぐ。その恥辱に肥大クリトリスは、敏感な海綿体を布地で擦られながら勃起膨らみ、脛までを隠す黒いロングスカートを持ち上げていた。女でありながら人前で股間を膨らませてしまった恥ずかしさに打ち震えるハリエッタ。そのスカートは後ろから捲り上げられている。そこから熟れ桃のように瑞々しい尻がほんのりと薄紅に染まって覗いていた。

だがその中心の淫靡な谷間には、毒々しい肉色の瘤ペニス、前日処女を失ったばかりの膣を深々と貫きハリエッタを宙に浮かせていた。胸を執拗に捏ね回しながら、彼女の小さな身体を上下に揺さぶる。その上獣男の腰は大胆にグラインドしながら、膣壁を刮げる。

「はうん、強すぎますっ! あうっ、そんな、深くまで、だめえっ!!」

ハリエッタの全体重がヴァギナにかかっていた。奥底までペニスに押し上げられ、子宮

がひしゃげる。その激感に背中を弓なりに仰け反らせながら、少しでも刺激を和らげようと足を伸ばす。しかし小柄な身体は、大きめのショートブーツを履いていても、爪先をわずかに地面をかすらせるだけで、自分の足で身体を支えることを許さなかった。

「むわああん!! 足つかせてええっ!」

ヴァギナを扶られ身悶えるハリエッタの周りを、貴族の女たちが取り囲み、猥雑な笑みを貼りつかせ、手を伸ばしてくる。セーラが男たちに苛まれているように、ハリエッタは貴婦人の慰み者とされつつあった。

「くふああつ、や、やめてええ! そんな乱暴に、んくあつ!!」

破れブラウスからこぼれ出た、水菓子のような甘乳を揉まれ、顔を歪めながら喘ぐ。

「まあ……もの凄い大きさ。いったいどのような淫らなことばかり考えていたら、こんなお乳になるのかしら?」

押し込めば、手首まで埋もれてしまいそうな柔肉を弄び、着飾った貴婦人が驚嘆する。

「……くうつ、違おう、私は、真面目に魔導の修行を……ああつ!!」

下着の残骸を貼りつかせた巨球の表面を、くすぐるようにささやかな愛撫でじらされる。途端に物足りなさを表情に表すハリエッタに、妖艶な笑みを浮かべながら貴婦人は言った。

「そうにはしたくない顔をして、いったいどのような魔導なのかしら? 厳しい修行ならば、このようなことも平気なのでしょうね」

意地悪な口調でなじりながら、撫でさすっていた手で乱暴に乳房を掴み、長く伸ばしマニキュアで彩った爪を、食い込ませながら揺さぶった。

「くんっ、い、痛いイ！ や、やめてえっ!!」

両方の乳房を寄せ、深い谷間を作りながら容赦なく揉みなぶる。汗濡れた表面を震わせ、弾力豊かな双球は重なり、柔らかな表面を擦り合わせながら、ほのかな紅に染まってゆく。ハリエッタの巨乳は、貴婦人が揉みまさぐるままに形をひしゃげた。生み出される強い刺激に、少女は眉間に皺を寄せ耐える。だが苦痛の入り混ざる快楽は、彼女のマゾっ気を絶妙に煽り、ハリエッタを次第に朦朧とした官能に陥らせた。

「ハア、ハアアン……や、痛あああ……」

顔が上気し、漏らす声がいままでにも増して、甘えたような細かい喘ぎに変わる。高ぶりを煽るように、貴婦人の赤い舌が、小振りの乳首に絡みついた。

「はくゆうっ！」

ねっとりとした軟舌に包まれ、ざらざらした表面で頭頂を舐め擦られる。息が詰まりそうな快楽にわななくと、それをはぐらかすように、舌は狭い乳輪をなぞりくすぐった。その間にも貴婦人の手は、相変わらず乱暴に乳房を捏ね回すのだ。

「どう？ お嬢ちゃん。こんな修行は初めてのようね？ それとも、もっといやらしいことばかりしてきたのかしらあ……」

絶妙の舌使いに、硬く勃ち膨らんだ乳首がキリキリと張りつめ、痛痒い快感をもたらす。貴婦人の猥雑な問いが耳朶を打つ。

「あああん、私はう、き、厳しい修行を、やり遂げああ……マリリオン王国の、ま、魔導人はあああうっ!!」

弁解しようにも、その先端を舌先で転がされると、息が詰まってしまふ。それに加え、乳から腰へと移った獣男の手が、ハリエッタの身体を緩やかに上下させ始めた。

「——ん、くふううううんん……」

決して強い動きではないが、男根を差し込まれた蜜壺を入念に掻き回され、深い溜息のような喘ぎが漏れてしまふ。くちやくちやくと湿った音を立てるスカートの下を、好奇心旺盛な貴婦人たちはレース布を捲り上げて覗き込んだ。

「まあ！ 生娘みたいな未熟なところに、こんな大きなものを頬張り込んで！」

「根本まですっぽりとくわえているのに、まだ押し込んで欲しそうに、ひくひくさせてる……いやらしいっ!!」

薄い陰毛に飾られたハリエッタの、桃紅に色づく陰部を女たちが囁きたてる。好きでこのような様をさらしているのではない。無理矢理に獣男のおぞましいペニスを押し込まれ、腔礫とされてしまったのだ。だが腔壁を瘤のような肉棒が擦り上げれば、より奥深くまで、獣根をくわえ込もうと、ヴァギナが脈打つようにひくつく。

(い、嫌なのに、気持ち、いい……うそ、私、本当はイヤらしい女の子なのかもお!!)

恥ずかしさと自己嫌悪さえも官能を煽る要素となってしまう。ビュクビュクと痙攣し、濃厚な愛液を垂れ流す股間に、貴婦人たちの視線が集中する。

「あくう……そ、そんなとこ、見たら駄、目、はああっ!!」

急いでスカートを下ろそうと手を伸ばすが、彼女たちに絡め取られ、指先をしゃぶられてしまった。生き物のように這い回る舌の感触に、ぴくんと身体が跳ねる。

臍の周囲を舐め、指先や舌がすべすべの腹や、脚の付け根を撫で滑ってゆく。ペニスをくわえ、大きく開ききった大陰唇の間から男根のように勃ち上がり、ピクピク震える巨大クリトリスを、彼女たちが弄ぶ。

「凄いわねえ、いくら気持ちいいからって、おちんちんみたいに大きく膨らませるなんて」
鼻にかかった声でからかいながら、肥大化したばかりか、感覚までも倍増された海綿体を、ペニスを扱うような手つきで、しゆるしゆるとしごく。

「こっ、これは毒虫に刺されて……やんっ! そ、そ、そんなこすつちや、はっああう!!」
性に疎い少年を導くような絶妙の手法に、ハリエッタの股間をたぎるような熱が渦巻く。奥底から止めどなく愛液を垂れ流しながら、膣壁は収縮し、獣男の肉棒を強く締めつける。
「っああああああっ! やっ、や、いやはああああああっ!!」

じゅぶぶぶぶ、と陰唇を震わせながら、獣根に貫かれた隙間から、透き通った潮が噴き

出す。飛び散るしぶきで股をしとどに濡らしながら、ハリエツタはビクンビクンと身体を痙攣させイッてしまった。だが彼女を取り囲む指は、その余韻に浸る間もなく新たな責めなぶりを、少女の身体に与えた。

「あらこんなところまでヒクつかせて……前穴だけじゃ、物足りないようね」

牢内で浣腸液に苛まれ、ぐちゅぐちゅになったアナルを、目ざとく見つけられた。早速細い高貴な指先が、開ききった皺門をいじり出す。

「くゅうううううっ!!」

その刺激にハリエツタは狂おしい嬌声を放った。周囲を軽やかに撫でさすりながら、指は直腸から分泌する、ぬめった潤滑水を絡みつかせ、柔穴をほじる。

「ひゃふうっ! そんなところ、汚いっ、んふわああ!!」

ただでさえ多量の放屁になぶられデリケートになっているというのに、肛門を弱点とするセーラと精神が繋がっている。鉤状に曲げた指が、無遠慮に直腸壁をちゅぷちゅぷと掻き乱す。その感触にハリエツタの菊花弁は激しく収縮して、悦楽に蠢いた。双穴を乱される官能に、ふつくらとした尻も、大きな果実を実らせる胸も、とろとろになってゆく。

「もう、やらあ……おかしくなっちゃふう……んもおっ!」

どの方向に身をよじっても、女たちの細い指は少女を官能の高みへと追い詰めてゆく。「あらあらそんなに身体を震わせて……わたしがもっと、気持ちよくさせてあげるわ。可

愛らしい魔導士さん」

「——あなたは！ ひいつ!!」

抑揚のない声に語りかけられ、ハリエッタは驚きに身を硬くした。セーラの痴態を満足そうに見物していたはずのナスターシアが、いつの間にか貴婦人たちに混じって、自分の股間を覗き込んでいたのだ。

まるで最初からそこにいたように、接近を感じ取らせなかった魔女の能力に驚く。その刹那ナスターシアの形よい唇が、ハリエッタの敏感クリに吸いついた。

「昨日初めて男性を受け入れたばかりというのに、もうこんなところを大きく勃たせて……マリリオンの宮廷魔導士は、なんて堪え性がないのかしら」

ぴくぴく震える巨陰核を嘲笑うように、魔女がなじる。

「そんなあつ！ 私は好きこのんでこんな、くふあつ!!」

口答えをする余裕も与えられず、軟体動物のような舌が、望んで肥大化されたのではない敏感器官を責め苛む。ぬめりとした感触が、包皮を脱ぎ捨て剥き出しとなった神経の密集突起に貼りつき、ゆつくりとした動きでしゃぶり回す。ざらざらとした表面で、全体を強く舐め上げたかと思うと、次には舌先で先端を軽くつつき、くりくりと捏ねる。

「まるでさかりのついた童貞坊やね。ちよつとしゃぶっただけで、ますますカチカチになっってしまった……それでもあなた女の子なのかしら？ はしたないわね」



確かに魔女の小さな口には収まりきらないくらいに、巨クリは大きさを増していた。

「やめ、てえ……もう、あそこが、くう……弾けそう、んはあつ!!」

わななき震えるクリトリスを、緩急強弱自在に蠢くナスターシアの舌が、根本から先端までぞわぞわとしやぶりあげ、少女魔導士を狂わせた。

「ひひやあああああつ! んあめえええ、私、変になっちゃふわあああつ!!」

女たちに柔肌を弄ばれ、巨乳房が過剰に揺れ動くのにも構わず、ハリエッタは全身を激しく振りたくる。頭の中に熱くまばゆい光が膨れ上がり、破裂しそうになる。下腹から生じた渦巻く官能が内臓を掻き乱しながら、全身へと広がってゆく。締めつける狭腔を押し返すように、男の獣根がぶこり、と根本から先端に向かって膨れ上がる。じゅるると腔壁を擦り上げ、ペニスは押し上げていた子宮口をさらにゴツンと叩きのめした。その途端、ハリエッタは理性を崩壊させ、身体をよじり乱れ狂う。

「くやあああつ! やだやだやだあああん!! く、くるうっ! 変です、またなにか、来ますっ! お股から、昇って……ああああああつ!! 頭真っ白に……ふ、はあああつ!」

イクという言葉も知らないウブな身体を、壮絶な絶頂が襲った。両脚を大きく開き、跳ね上げてしまう。背後から身体を抱えられ脚でMの字を描くその様子は、子供が親におしっこをさせられる格好そのままだった。

連続してぶじゅぶじゅと潮吹き、地面にこぼれ落ちる大量の愛液が、失禁を思わせる。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>